

アイヌ民俗文化財
ユーカラシリーズ 73

金成マツ筆録 アイヌ叙事詩
女性叙事詩
小鳥の耳飾り (2)
Menoko Yukar
Chirpo Ninkari

高橋靖以 訳

北海道教育委員会

小鳥の耳飾り（2）

Chirpo Ninkari

目次

例言

原テキスト	1
表題	1
編集要綱	1
分担	2
参考文献	2

物語 小鳥の耳飾り (2)

第4章 酒宴 (承前)

4.8 沼の神の元へ	3
------------	---

第5章 イヨチ人の思慮

5.1 妹の恋心	3
5.2 仮病	4
5.3 拒絶	5
5.4 沼の神	5
5.5 弟君	6
5.6 帰還	7

第6章 シヌタブカにて

6.1 目覚め	8
6.2 兄の語り	9
6.3 シヌタブカへ向かう	10
6.4 シヌタブカの館	11
6.5 酒宴の支度	12
6.6 一族の参集	13
6.7 姉への復讐	14
6.8 結婚	15
6.9 別れ	17
6.10 兄との暮らし	17

小鳥の耳飾り（2）

第4章 酒宴（承前）

4.8 沼の神の元へ	21
------------	----

第5章 イヨチ人の思慮

5.1 妹の恋心	24
5.2 仮病	30
5.3 拒絶	35
5.4 沼の神	39
5.5 弟君	44
5.6 帰還	53

第6章 シヌタブカにて

6.1 目覚め	59
6.2 兄の語り	65
6.3 シヌタブカへ向かう	73
6.4 シヌタブカの館	80
6.5 酒宴の支度	90
6.6 一族の参集	97
6.7 姉への復讐	107
6.8 結婚	121
6.9 別れ	131
6.10 兄との暮らし	135

例言

1. 原テキスト

この「小鳥の耳飾り（２）」は、令和３年度に公刊された「小鳥の耳飾り（１）」の続篇である。原テキストおよびそれが書かれた手帳の体裁などについては、既に「小鳥の耳飾り（１）」で述べたので、ここでは触れない。

2. 表題

物語の表題は次のように書かれている。

chirpo ninkari chirpo tamasai

この報告書では次のような表題とした。

アイヌ語表題 Chirpo Ninkari

日本語表題 小鳥の耳飾り

また、金成マツは本テキストのジャンルについては記載していない。しかしながら、物語の内容から判断すると、本テキストは Menoko Yukar 「女性叙事詩」というジャンルに属するものとみられる。参照の便を考慮して、表題に Menoko Yukar と「女性叙事詩」という語句を加えた。

3. 編集要綱

本書では原テキストを以下の要領で編集し、対訳をおこなった。

- (a) 叙事詩の詩句を再現することを意図し、１行が４音節ないし５音節に収まるように改行をおこなった。しかしながら、例外も多く、６音節以上になることがある。また、詩句の再現が困難であり、恣意的にならざるをえなかった場合がある。
- (b) 固有名詞については大文字を使用した。そのほかの大文字はすべて小文字に置き換えた。
- (c) 語の切れ目に従い、原テキストの分かち書きを変更した。また、原テキストにおいて、改行により分断されて表記されている語は、もとの形を再現して示した。
- (d) ２行の詩句にまたがる動詞については、１行目の末尾にハイフンを補った。
- (e) 人称接辞と人称語幹の境界にハイフンを挿入した。
- (f) 各行（詩句）に通し番号をつけた。また、手帳のページ番号も示した。
- (g) 物語の内容に従い全体を三つの章に分け、各章をいくつかの節に分けた。また、それぞれの章、節に見出しを付けた。
- (h) 原テキストはローマ字表記であるが、片仮名によるアイヌ語表記を新たに加えた。
- (i) 各行にアイヌ語の逐語訳を加えた。逐語訳は極めて便宜的な性格のものである。アイヌ語の文法を理解した上で利用されたい。紙面の制約により、たとえば繫辞類を「繫」、理由・目的の接続詞を「根拠」、形式名詞を「形名」、などと省略して記した。
- (j) 脚注は最少限にとどめた。
- (k) 「物語 小鳥の耳飾り」を本文の前に加えた。

4. 分担

編集に当たっての分担を示す。

- (a) 原テキストの解説・翻訳（数字は「小鳥の耳飾り」の行番号）
高橋靖以 II. 4923-10046
- (b) 片仮名アイヌ語表記
高橋靖以・切替英雄・山下浩一
- (c) 逐語訳
高橋靖以 II. 4923-10046
- (d) 物語 小鳥の耳飾り
高橋靖以 II. 4923-10046

5. 参考文献

テキストの翻訳にあたって参考にした文献を以下に示す。

- (a) 金成まつ（筆録）・金田一京助（訳注）『アイヌ叙事詩ユーカラ集』I-VII. 三省堂, 1959-1966 年.
- (b) 金田一京助『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』II. 東洋文庫, 1931 年.
- (c) 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店, 1977 年.
- (d) 田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』草風館, 1996 年.
- (e) 服部四郎(編)『アイヌ語方言辞典』岩波書店, 1964 年.
- (f) ジョン・バチラー『アイヌ・英・和辞典（第4版）』岩波書店, 1938 年.

物語 小鳥の耳飾り(2)

第4章 酒宴(承前)

4.8 沼の神の元へ

「さてさて、イヨチ人、年少の兄よ、話すからよく聞いてください。悪い心を抱いてこのように言ったのではありません。偽りなく私の思いを話したのです。あなたは拒絶して、さらには、若い娘、若い女である私に対して、恥辱を与えるにしても並大抵ではないことをしたのです。私は後悔しています。これまでと変わりなく、この人間の村で暮らして結婚することはできません。いっそのこと、如何なる生まれの者、如何なる育ちの者が沼の神であろうか。悪い姉は私を与えようとして、長い間祈りをしていた。その腕の中に私を投げ捨てようとして、私を痛めつけた。私を殺して、沼の神のところへ私が行ったならば、それで良かったのに、どうしてあなたは私を救い出したのですか。立派な心を持っているものと思っていたのに、私に恥辱を与え、屈辱を与えたので、私は後悔しています。どのような顔をして、どのような表情をして、この世界に在ることが出来るでしょうか。そこで、沼の神の腕の中に身を投げることにします。承知してください。後から追いかけてきても、これから私が何をしたとしても、私に構わないでください。」

私はこのように言い、家の外へ出た。城の端から、何かの形をしたような白い鶺鴒の筋がはるか遠くの山奥の上に伸びていた。それがかすかに見えていた。私はそれを目で追いかけて、その上に飛び乗った。はるか山奥に私は向かった。どこかへ進んでいった。見ると、よもやまた、そのようなことがあるとは思わなかったが、以前、悪い姉が私を痛めつけて殺した大きな沼のほとりに私は降りた。そして、私は口元に笑みを浮かべた。私は沼の中へ手を入れて手招きをした。

「さてさて、沼の神、神である勇者よ。今はまさに、その腕の中に私は逃げ込みます。早く私を捕まえてください。」私はこのように言い、懐の刀を取り出して胸元を開いた。私の小さな胸に刀が突き刺さる音が鳴った。そればかりを良い夢のように覚えており、暗い穴の底に突き落とされたかのようなのである。死んだのか眠ったのか、わからなくなった。ここで話は他のところへ移る。

第5章 イヨチ人の思慮

5.1 妹の恋心

あのように、ノヤサラの女の妹の方であると思われる者を私は蘇生させた。まことに驚いた。私は神慮を伺っていた。様子を見ると、なるほど、数多くの村を越えて良い噂がたつ者であるから、少女の身体を見ることができない。たちこめた靄、その靄の中に身体を入れている。毎口、年少の姉の前で立ち上がり、まことによく働く。煮炊きや掃除も、刺繍も上手であり、まことに私は驚いていた。そのようなこととは思わなかったが、まことに、あのような理由があつて、ノヤサラの女は妹を酷く殺し、あのように白々しい嘘をついた。人々は皆、その嘘を信じたようであるが、私もまだ幼い子供、少年であり、同じように、トミサンベチ、シヌタブカの弟君もまことに幼いことも分かっていた。

そこで、この少女が大きくなるまで、私のところに留め置いたならば、その後で、神の意向によって、如何なる理由も分かるはずだと思った。何も少女には言わないようにして暮らしていた。年少の姉も承知しているものであるから、少女を心臓の先に入れるようにして可愛がりながら暮らしていても、争いの話も、どの者であるのかも、少しも少女に話すことはなかった。少女はまことに心の中で不思議に思っていることが私には分かっていた。私は心の底を調べてみると、少女のふるまいも、私のことを気にしている様子も、まことによく分かった。私に想いを寄せる様子もよく分かった。私は心の中でよく考えた。もはや充分に、少女は妬まれるにしても並大抵ではないことをされたのだ。私はそこに駆けつけて蘇生をさせたのだが、とても蘇生はできないように思われた。可哀想に、成長した少女、成長した女が容姿を痛めつけられるにしても、並大抵ではないことをされたのだ。私はそれを見て、救い出すことも、どのようにすることも、どのように言うこともできない。

成長した女であるから、想いを寄せることばかり、考えている。如何なる場合でも、私とは別である者に少しも好意を向けることはない様子を私は見て、息をすると

ころも塞がれたように思われた。このような神、このような貴人がまだ格下の者と共に育った者であるならば、私は男の端くれであるから、他のところへ行かせるものではないが、弟君と揺り籠の上から、襦袢の上から育てられた者である。そうであるからとても、夜も昼も、いつまでもそのことを考えたが、ノヤサラの女を妻にすることはできない。そこで出来る限り、少しも、娘を眺めることも、振り向くことも、話しかけることもしなかった。笑いかけ、何か話しかけたならば、なお一層、私に想いを寄せ、恋煩いをする事になれば、どうすることもできない。私は憐れに思い、心の中では幾度も嘆き悲しみ、自らを責めた。

私は気持ちを抑えていたが、ある日、あのよう、トミサンベチから知らせが来た。僅かばかりの酒が醸されたので、年少の姉と私は話し、「これから向かうつもりだ」と私は言ったが、ノヤサラの女、私の妹がそのように振る舞うことを、酒宴の衣装を纏って連れ立つときから、酒宴の座で私のことばかり見ていることを私は不思議に思い、そのようにすることが私には分かった。そうであるならば、弟君がいかにか雄弁であり、またとない頭領であったとしても、若者の心、若人の心を持つものであるから、あまり良い気持ちはしないであろうと思った。弟君が少しでも、思いがけず、悪い気持ちをいやくようなことはできない。そこで、少し嘘をつこうと私は思った。三人で、まことに喜びながら、酒宴の衣装を身に纏った。驚いたことに、年少の姉もまことに神の如き姿であり、美しい様子であるが、ノヤサラの女は人間の女ではなく、祈りを捧げる神が地上に降りたかのようなのである。まったく身体を見ることができない。たちこめた靄、その靄の中に身体を入れている。このような神、このような貴人が自らを差し置いて、あたりまえに私に感心し、私を称賛するものであるならばさもあるが、私の手前へ視線を落としている。その様子を私が見ると、自らのことではあるが、自らを持って余すようである。

5.2 仮病

左座で突然私は倒れ、「腸が急に痛くなった」と言い、弱い呻き声と激しい呻き声を繰り返した。年少の姉と妹は、まさに驚き、二人で私を治癒し、薬を用意した。少し回復し、自ら治癒することができるようになったので、早く行かせてこのような事情を話させた。「少し私に飲

みさしを持ってきなさい」と言うと、二人でまことに心配し、何度繰り返しても、私と別れて出かけることができない様子である。私は刀の柄を押さえつけた。そうすると、畏まったものであるから、出かけていった。まことの病にかかったものであると思って、まことにそれを信じているようである。その後で、私は密かに笑いを浮かべた。一晩中物思いにふけり、眠ることもできずにいた。

今はもう真夜中あたりになって、トミサンベチ、シヌタブカから、かすかに神が向かってくる音がした。早く向かってくるものであるらしく、しばらくすると、外の櫓、その櫓の上に降り立った。家のそばで何者かが早く歩く音がした。男であるならばさもあるが、女であるらしく、懐の宝物が鳴り響いた。玄関の納屋にまわり、垂れ下がった簾戸を風でそよがせて、土間の上に入ってきた者を私は見た。宝物の光、宝玉の光のそばで、よもやまた、それを見ることになるとは思わなかったのに、ノヤサラの女がただ一人でおり、炉の前へ何かを置いた。それから、埋もれた火を灰の上に掘り起こした。家の中は明るくなった。いつものように、神の如き様子である。かなり酒を飲んだらしく、酔いが表情にあらわれている。ますます、人間の容姿であろうか。どのように称賛することもできないほど美しい。妹はお膳と美しい杯を並べて取り出した。その間、私は熟睡していたものであるから、寝息を立てていた。

妹は左座へ座った。畏まりながら、このような次第で、一人で帰ってきたことを話し、私を起こした。それを聞いて、私は驚きの気持ち、感謝の気持ちを抱いた。今まさに目覚めた者であるかのように、私が起き上がると、まことに喜びながら、笑いを浮かべた。このように、神の住まいで私の一族が変わりのない様子であったことも、宴会が楽しく、初めて酒宴を見て感心し楽しかったが、年少の兄、一人だけを見なかったということも話した。妹は私に酒を注ぎ、私は神に祈った。何とまあ酒の神は味が良いことか。まことに良い味であり、気分が良くなった。今は飲みさしの杯を空けさせず、再び私は飲みさしを渡した。今は二人きりであるものであるから、妹は喜んだ。私は憐れに思い、私もおかしげな言葉を幾度となく口にした。

5.3 拒絶

もう夜明けが近くなった。そうすると、妹は何かを言いたそうにしていたが、あたりまえに言いにくそうにするものであるならばさもあるが、幾度となく唾を飲み込んでいることが私には分かった。今は妹は決意を固くした。そのようなことであると思っていたのだが、妹はこのような次第で、若い心を悩ませたこと、このように考えて、私以外の者に嫁ぐつもりはないと思っていることをすべてそのまま話し、私の考えを聞きかたがった。そう言われて、ここで穏やかな言葉、優しい言葉をかけたならば、なお一層良くないと思いはし、わざと罵りの言葉を浴びせた。あのような怒りの言葉を幾度も口にしました。私は刀の柄を押さえた。私が話をすると、妹はそれを聞いて、可哀想なことに、激しく後悔し、激しく驚いたものであるから、炉縁木の背後で頭を下げていた。表情はこわばっている。妹の泣く声が響いた。そして、あのように言い、飛び跳ねて家の外へ出た。

私は聞いたり見たりしただけではあるが、逃してはならないと懸命になった。大いに慌てたものであるから、大きな杯を上梁、その梁に向かって投げつけた。私が飛び上がる音が鳴り響いた。私は外へ出た。私の直前に外へ出た妹はどこへ行ったのであるか、周囲を見渡した。幾重にも重なった雲の間を私は見回した。そのようにしても、如何なる鳥にも虫にも雲にも、何か不審に思われるものは、一つも動くものは見えなかった。そこで、以前に行った大きな沼を私は思い出した。天空へ私は飛び上がった。一気に山の奥、遠く山奥、その山奥に向かった。その大きな沼、沼の岸に私は降り立った。

見ると、よもやまた、そのようなことであるとは思わなかったが、まさに、私より先に外へ飛び出し、すぐに私が追いかけた妹がいる。何と足が速いことか。沼の縁で逆さまに伸びている。よもやまた、そのようなことは思わなかったが、小さな胸に小さな鏢のある刀が突き刺さっている。硬くなった身体が伸びている。身体表面は幾重もの悲しみの神の影に覆われている。いつと変わりなく、死に顔をした者はますます、どのように褒めることもできないほど美しい。それを見ると、何とことか、何としたことか。何の悪いふるまいも、何の悪い心も私は持たず、少しのくだらぬことさえできないのに。二度も三度も、ノヤサラの女、弟君の妻となる者、連れ添う妻が死ぬとそのたびに、私ばかりがそれにぶつかるのであるから、どのようにすることもできない。妹

が言ったことであるから、今は沼の悪神の腕の中に身を投げて、自らを抱えさせたのだと気が付くと、どのようにすればいいのか、どのようにすることもできない。

5.4 沼の神

その間に再び、大きな沼の真中が持ち上がった。以前のように、もう少しで妹を捕えるところであった化物、その目は満月のように並んでいる。沼の上で、目の光が星の光のように輝いている。悪神の声が鳴り響く。私は不気味に思った。悪神はゆらゆらと上陸してきた。身体の前で波が分かれた。そこで、痛罵の言葉を私が発する様子はこのようであった。

「さてさて、沼の悪神よ。このように、二度も三度も、人間の女、成長した娘を捕まえたいと浮かび出てくるのであれば、清らかな神ではない。性悪の神、極悪の神であろう。悪神であっても、人間の国土、その国土の上に仲間入りしているのであれば、人間たちがおかしな心を持ち、悪いおこないをしたならば、それを良いようにおまえがするのであれば、堅い逆さ削りの木幣で、固まった酒粕で祀られて、異なる神、異なる貴人となっても、おまえは神となるであろうが、正しくないおこないであることをおまえも承知している。人間の女を捕まえるために、このようにするのか。

私も頭領の端くれ、勇者の端くれであるから、以前は、おまえを殺そうとして出来なかった訳ではないのだが、戦いの原因、争いの原因を知らなかったのだ。おまえを待たせたのだ。今は、戦いの原因、争いの原因がよく分かったのだ。その娘はトミサンベチ、シヌタブカの弟君の妻となる者、連れ添う妻である。ノヤサラの姉は、淫乱に取り憑かれ、淫欲に取り憑かれ、妹を妬んで殺したのだが、その時に、沼の神であるおまえがいることを知って、妹を沼の神に祈って託し、その腕の中へ妹を引き渡すと言ったのではない。これらははすべて極悪の神、極悪の貴人であるおまえが仕組んだことであろう。おまえの意向でこのように、ノヤサラの女は腕の中に身を投げて、おまえが迎えに来たことも分かっている。今からおまえを討伐することもできなくはないが、私がおこないを恐れているものが、弟君であるのだ。弟君が討伐をして殺すはずのものを、その前に、私の意向で討伐し、戦うことはできないのだ。少し待とう。もう少し待ちなさい。トミサンベチ、シヌタブカの弟君、神である

勇者が間もなく来るであろう。弟君が来る前に妻となる者、連れ添う妻の身体を捕まえるな。」

このように私が言うと、このような神であっても、どこに耳があって話を聞くのであろうか。少しずつ動きが遅くなった。すると、よもやまた、そのようなことがあるとは思わなかったが、私が話したはずのことと思っただが、トミサンペチ、シヌタブカで轟音が鳴り響いた。国土の上で、怒れる神が向かってくる音が鳴り響いた。私とは別のところへ来るものであるならばさもあるが、私の方へ向かってくる。驚いたことに、幾重もの渦巻きを自らの前に巻き起こしている。木に当たる風はばたばたと鳴り、地面に当たる風は轟音をたてる。折れやすい木が折れる音が鳴り響く。折れない木はしなやかな蔓のように、しなやかな枝のように地面の上に伸び、跳ね上がる音が鳴る。風の先端で粒の大きい霰、粒の大きい雨が地面に落ちる。激しい土埃、激しい草のごみが黒々とした雲のように、激しい吹雪のように飛び散る。大きな沼の上の方の水面は下になり、下の方の水面は上になる。極悪の神はそれを聞いて、沼の底へ身体を隠した。

5.5 弟君

その間に、何者かが私のそばに降りてきた。それほど大きくない霧の小山があり、たちこめた霧、その霧の中を私は目で散らして見た。幾度眺めても、人間の姿を見定めることができない。長い間そうしていると、霧の中で私の目の前が暗くなった。人が噂をする弟君である。もっと大きい男が疾走する音、憑神を伴う音であると私は思っていたが、今年あたりに、私に届かないほどの成長を遂げた少年である。木鈴のついた着物で身体を覆っている。留め金のついた帯を胴に回している。神授の刀を帯に差している。薄造りの兜、飾られた兜、その兜の下げ紐を顔のところで強く結んでいる。兜の端には神々しい顔があり、昇る太陽のように私に照り返す。勇者であるらしく、勇者の容顔で顔色が異彩を放っている。このような神、このような貴人は、お返しに、霧の中心を幾度も、私に対して散らした。長い間そのようにして、私の片方の顔を見定めると、表情が蒼ざめた。自らを差し置いて如何なる神、如何なる貴人を目撃したというのか。当たり前私に感心するものであるならばさもあるが、私の手前へ視線を落としている。

弟君は口元に笑みを浮かべた。よもやまた、そのよう

にするとは思わなかったが、「年少の兄よ」と言って、跳躍しながら私の腕を掴んだ。私の心は和らいだ。「弟よ、心臓よ」と言い、私は弟を抱きかかえた。跳躍しながら、急ぎ慌てながらではあるが、じつくりと挨拶をした。弟君は、若々しい言葉で喉を動かし、このように言った。

「さてさて、イヨチ人、年少の兄よ。話をするから聞きなさい。私はノヤサラの女、私の妹が幼少の頃から姉に妬まれている様子に気付いていたのだが、私は幼い者であるから、どのようにすることもできなかった。そこで、私の意向で、私たちは同じ一族であり、まさしく、あなたの雄弁と勇気を頼りにした。そこで、妹を蘇生させることをあなたにさせた。成長する中で自らの心を悩ませていたことも知らなかったのではない。ノヤサラの女、年長の女は淫乱に取り憑かれ、淫欲に取り憑かれ、妹を妬んだ。殺すにしても並大抵ではないことをしたのだが、半ばはノヤサラ村の奥にあるこの大きな沼にいる者、蛇体の異形の神、異形の貴人の仕業である。この沼を守護していたのだが、貧しい女があのように言った。そこで、振り向くと、まさにノヤサラの女、私の妹の美しい姿を気に入ったのだ。それから、そのことばかり考えて、妹を捕まえて妻にしようと思い、上陸した。

あのようにあなたが追い払って、妹の痛めつけられた肌着に血が付いているのを元通りにした。そのおかげで落ち着いて、今までいたのだが、その間に、妹は惑わされて、あなたのことばかり考えさせられたのだ。そして、今晚あのように妹は話をしたのであるが、悪神の意向であのように言ったのだ。その後で、あなたもあのような罵りの言葉を言わずにいても良かったのだが、悪神の意向であのように言ったのだ。そこで、その言葉を聞いて妹は後悔し、悪神の意向によりここへ誘い出されて、自ら命を絶った。悪神は妹の魂を奪い取ってしまったのだ。妹の亡骸を手に入れるために上陸してきたときに、あなたの声がしたところを私は見つけて駆けつけたのだ。今はこれほどまで私は成長したのだから、これからは何一つ恐れるものはないのだ。そこで、心配せずに、これからあなたの城へ帰り、背後で支えてほしい。

私はこれから、極悪の神に向かって戦いを挑む。妹の魂を捕まえて蘇生させるつもりだ。今言ったことをよく聞いて、承知してくれないか。妹の魂のない身体はこのように、私が戻るまでそのままにしてもよい。極悪の神は、私をただの人間であると思って侮り、見下しており、妻を奪おうとして笑いを堪えていた。私が駆けつ

ける音を聞いて驚き慌て、まことに私を怖れた。妹の魂を奪い取って、自らの館へ逃げていった。その後を追いかけることは出来ないだろうと思っている。笑わずにはいられない。如何に自負があろうとも、私はただの人間であるから、極悪の神が私を殺すことも出来ない訳ではないと思う。早く私の背後で支えてほしい。戦いの後、凶事の後で落ち着いたときに、再び僅かな酒を醸して、そのときに穏やかな会見、親族の会見をしようではないか。」

弟君はこのように言い、死んだ妹の身体の表面を、今はまさに、見回した。初めて見回した。何ということか、何としたことか。私の弟君、成長した少年、成長した若者は、妹が妬まれて死んだ様子を見ると、あたりまえに憐れむものであるならばさもあるが、悲しみの表情を何度となく顔に浮かべた。比類なき勇者の目の端に涙が浮かんだ。それを見て、私も勇者の端くれ、頭領の端くれではあるが、息をするところを塞がれたような気持ちになった。可哀想に、成長した少女、成長した娘は良い再会、穏やかな再会をする筈であったのに、同じ家の中で妬みを受けるにしても、並大抵ではないことをされたのだ。その結果、悪神が悪事に加担したのだ。これから、弟君は極悪の神に戦いを挑むのだが、本当に妹の神の魂を取り戻すことができるのか。本当に極悪の神を討伐することができるのか。このように考えると、私は幾度も目に涙を浮かべた。

5.6 帰還

その間に、弟君は沼の底に潜っていった。それと別れて、天空へ私は飛び上がった。私が疾走する音が鳴り響いた。私は家の中に入って火を起こした。それから、家の中で私が祈るすべての神々に、これまでの出来事を残らず話して聞かせた。それから、長押にある槍を取り出し、それを低い杖として身を支えた。幣冊の上手から下手へと、魔払いの行進を懸命におこなった。数多くの神々の出自を明らかにして、私が談判する声が郭公の声のように響いた。弟君の背後で幾度も跳躍した。その間に耳を澄ますと、夜も昼も、ノヤサラの村の川の源流で神々の激しい戦いが巻き起こった。あるときには、神の造った天空が粉々に崩れ落ちるかのようである。天空は鳴り響いた。国土の上手でも、国土の下手でも、何者たちが追いかけてきた。あるときには、人間の国土、そ

の国土の中で轟音が響いた。それを聞いて、私は弟君が殺されないように言葉を唱え、魔払いをおこなった。

しばらくすると、何者かが地下の世界へ蹴落とされる音がした。再び国土の上手に浮かび出ようとする、上から踏みつけられた。国土の下手に頭を出そうとすると、上から踏みつけられた。今は湿った地下の世界に蹴落とされた。地下の世界で音が低く響いた。その後で周囲は静まり返った。それから、沼の底から弟君の憑神が現れた。私にもよく分かったのだが、弟君は天空へ飛び上がり、トミサンベチの山奥で音が鳴り止んだ。私は驚きの気持ちを抱いた。驚いたことに、私の弟君、背負われた子供、背負われた赤子は憑神の力のためか、奮戦のためか、まことに恐るべきこと、驚くべきことをする。霊能力に優れた者であろう。その音を聞いて私は驚きの気持ちを抱いた。

再び私は神に感謝して家の中に入り、まことに安心した。驚いたことに、成長する中でノヤサラの女、私の妹を私は蘇生させた。弟君を私は気の毒に思ったので、色々なことで自ら悩んでいたのだ。驚いたことに、弟君の意向によって、私は妹を蘇生させたのか。その次に、ただの人間が、驚いたことに、私の心の中を見通していたのか。私は驚きの気持ちを抱いた。幸いにも、神のおこない、頭領のおこないをして、あのように言われたので、私はまことに安心した。何ということか、何としたことか。ノヤサラの女、私の妹はいつも私のことばかり考えているのだと思っていた。可哀想なことに、長い間共に暮らしていたのに、怒りの言葉、痛罵の言葉を幾度となく浴びせたことを思い出した。恐ろしいことに、極悪の神の意向であるようになったのか。そのことを知っていたら、あのような神、あのような貴人に言葉をかけるにしても、数多くの良い言葉で宥めたはずであるのに、と思ったが、いまさらどのように話すこともすることもできない。

いい気味にも、極悪の神は下らぬことを言って人間に悪戯をした。それから、元々は正しくないことであるから、湿った地下の世界に蹴落とされた。それで私はまことに安心した。早く、トミサンベチ、シヌタブカで、弟君が言った通り、穏やかな会見、良い会見をしたいものだ。私の一族全員に会いたいものだ。ノヤサラの女の年長の姉は淫ら事をするにしても、淫欲にまみれたとしても、何ということか。驚いたことをするものだ。それから、そのようなことも気付かずに、再びトミサンベチ、シヌタブカで酒宴があったときに、そこで、人々は皆、

夫婦となるだろう。そのときには、弟君の妻となることを今こそは密かに喜んで笑っているに違いない。そのように考えると、私も幾度となく密かな笑いを浮かべていた。ここで話は他のところへ移る。

第6章 シヌタプカにて

6.1 目覚め

短い間であるのか、長い間であるのか。眠っているのか、死んだのか。私の心は朦朧として、狂ったかのようなのである。いつしか、私は目を覚ました。聞いていると、若者の喉、私が聞いたことのない若々しい喉で何者かがする談判が郭公の声のように響いた。私についての祈りであった。その片方の顔のところで私は目を覚ました。よもやまた、そのようなものを見るとは思わなかったが、私は妬まれたのだ。私は成長した娘、成長した女であるのに、痛めつけられ、殺されるにしても並大抵ではないことをされた。そこで、イヨチ人、年少の兄が私を生き返らせてくれた。

そこで、私は気持ちを抑えた。どうにかして、妻になりたいと思い、口の中で、私は成長した娘であり、この気持ちを偽りなく話した。兄は憐れむこともなく、恥辱を与えるにしても尋常ではないことを私にした。私は恥ずかしく思い、後悔した。私は祈りをされて、沼の神の腕の中へ身を任せた。どうして年少の兄は私のような者を蘇生させたのか、私は怒りの気持ちを抱いた。いつも妬まれていた者、年少の兄にはどうしたことか、まったく想いを寄せることはなかった。沼の神のところへ行くことばかりを考えて、私は飛び上がった。あのように、そのように悔しく思い、恥ずかしく思ったので、この国土の上で暮らすことはできないので、「沼の神の腕の中へ向かうつもりだ」と言って、天空へ飛び上がった。

その途中で、私の背後で轟音が鳴った。年少の兄がしばらくすると、私を抱きかかえた。地面に向かって降りていくと、林の上に私を叩きつけた。今はまさに、言葉というものを発し、痛罵の言葉が私を突き刺すように、私を斬り裂くように、喉の中で響くことはこのようであった。

「何と汚らわしく、忌々しいことか。ノヤサラの女、貧乏な女、下らぬ女は、言葉にしても恐れ憚ることがな

いのか。私の意志でおまえを妬んでいるというのか。毎日何も食べずにおまえの神である夫、尊い神、まことの神である沼の神と戦いをした。沼の神は湿った地下の世界へ蹴落とされた。今はまことに、自らを神として、喜びながらいるであろう。さあ早く、その後を追いかけていのであれば、行きなさい。」

このように言いながら、私の頭髪を手でつかみ、私を太い木や細い木の幹の真中に叩きつけた。よもやまた、そのようになるとは思わなかったが、私の絹の帯は切れてしまい、私が着ているものは破れてしまった。私の首元にあった神の首飾りも、耳の上にあった神の耳飾りも、神の鉢巻きも、すべて身体から離れてしまった。兄はそれらをすべて集めると、大きな包みを拵えて、呪言を幾度も唱えながら、遠くの岩山、岩山の背後に投げ棄てた。私は裸となり、地面の上で転がった。兄は私の頭髪を手で巻き付け、川へ引き摺っていった。川上へと、川下へと、私を水とともに叩いた。それと同時に、私の身体は軽くなった。元気であるからあのように振る舞ったのであるが、急に、私は腕の力も萎えてしまった。このまま死んでしまうのかと思った。

何ということか、何としたことか。私は成長した娘、成長した女であるのに、如何なる不運に見舞われたのか。二度も三度も、成長した肌、尊い肌を汚されて、痛めつけられるのであるから、まことに悔しく、恥ずかしく思ったが、どのようにすることもできない。私の泣き声が響き渡った。今は、どのような顔をしてこの国土で生きていくことができようか。このように思うと、私は身を投げ棄ててしまいたいと思い、私の泣き声が響き渡った。私は身体を屈めたり、身体を捻じったりした。年少の兄は私を捕まえると、林の上に向かった。

兄は自らの帯を解き、肌着として着ている小袖を脱ぐと、私に巻き付けた。それから、よもやまた、驚いたことに、私に非道なことをして、私を折檻していたのに、そうするとは思わなかったのに、兄は萎れた草のように私の上で号泣した。「妹よ」と、「心臓よ」と言って、私を撫でた。子供を抱くようなこと、赤子を抱くようなことを私にした。強く抱きかかえた。比類なき勇者は私の上で幾度も濃い涙を流したあげく、喉の奥を響かせて言うことはこのようであった。

6.2 兄の語り

「さてさて、私の妹よ、話をするからよく聞きなさい。このように、私たちは同じ一族であり、共に育った者である。二人とも幼く、その間に、あのようにおまえの悪い姉、極悪の人間、極悪の神がおまえを妬んで殺した。さらには、沼の悪神、異形の悪神、そのおこないが恐ろしい、夏には名を言わず、火のそばでも名を言わない蛇体の神、沼の真中にいる者は、おまえの姉から、『沼の神の腕の中に引き渡す』と言われた。その言葉を悪神は聞き、振り向くと、そのように考えはしないのだが、おまえは少女であり、女であり、あまりにも容姿が美しく、立派である。そこで、あいつはまさしく、すぐにおまえに想いを寄せた。おまえの死んだ身体を奪おうとして、浮かび出たときに、私は幼い者であるので、とても悪神と戦うことはできなかった。

私では力が及ばないと思ったので、私の意志で、私が頼りにしていたイヨチ人、年少の兄は比類なき勇者であるのだ。そこで、おまえを蘇生させたのだ。年少の兄は上手い具合に悪神を追い払ったので、極悪の神は今まで待ち構えていた。長い間、イヨチ人の城におまえがいる間に、年少の兄とともに、あのような考えを抱いたのを私はまったく知らない訳ではない。成長の途中で、イヨチ人、年少の兄他には、他所の土地を踏むことは考えなかった。おまえがあのように考えたことを、私は有めることもできない。あのような理由があって、おまえはあのように考えたのだ。悪いことではないが、ほとんどは沼の神の意向であり、あまりに強く、おまえは想いを寄せた。

イヨチ人、年少の兄は私を気の毒に思い、心の中で、おまえをよく可愛がり、よく話をしたいと思っていたが、我慢した。しばらくの間、同じところで暮らしていても、まったく、おまえに話しかけようとはしなかったのだ。悪神の意向であるから、思い通りに、早くおまえの魂を奪いたいと思った。口の中でおまえはあのように言い、あのように年少の兄が怒ったことも、おまえが怒ったことも、すべて悪神の意向である。そこで、悪神の腕の中におまえは逃げて自らを殺した。そこで、今は、おまえの死んだ魂を悪神は奪い取った。おまえの死んだ身体を奪い取ろうとすると、その間に、年少の兄が駆けつけて、あのように言った。

その間に、私はそれを見てすぐに駆けつけ、年少の兄と会見をした。あのように、互いのことを話してから、

館へ帰って私の背後を守護するように頼んだ。兄と別れてから、私は悪神の住まいへ討ち入った。それから戦いを始め、夜も昼も、戦った。まさしく、奮戦しなかったならば、もう少しのところで先に敗れてしまいそうであった。毎日、物も食べずに戦い、長い間戦ったあげく、私は悪神を殺した。今は、湿った地下の世界に蹴落とされた。私はおまえの魂を捕まえて、ここで蘇生させたのだ。私の館に運んで蘇生させてもよかったのだが、早くおまえに会いたいとばかり思った、それから毎日、夫婦の暮らしをするまで、我慢することができないように思った。そこで、この場所で、人目を気にすることなく、人目をばかすることなく、おまえを蘇生させたのだ。

極悪の神は悪い悪神がまさっているものであるもので、いつまでも、妬むものであるもので、まだまだ、悪神の心をおまえは持ち、再び沼の神の腕の中に逃げ去るつもりだ、とおまえは言いながら逃げたので、あのようにおまえを折檻した。おまえの衣装は何もかも、すべて私が裂き、悪神のところへ投げ棄てた。このことでさえ、極悪の神は自らを神とするであろう。今は、おまえの心の中も、おまえの身体も、少しも悪神の考えは残っていないのだ。今は、おまえの身体を魂とともに、すべて元通りにしたのだ。人間の心を取り戻すために、私はあのような非道をおまえにした。幾度となく痛罵の言葉をおまえに浴びせたが、何かの悪い心を抱いて、何かの悪い意志があって、おまえを折檻したのではないことも、今はすべておまえは分かるであろう。

成長した肌、尊い肌を汚されて蘇生させられたことを、おまえが恥ずかしく思い、自らの身体を投げ棄ててしまおうと思っていることも分かっている。そのような考えは、まことに実りのない考えである。戦いのならわし、争いのならわしは昔からそのようであり、秘めたる肌、尊い肌は、誰であっても汚されるものだ。成長した肌を汚されたからといって、大勢の者たちが見た訳ではない。私一人が見ただけであって、私はよそ者ではない。もう少し、しばらくしたら、同じ一族となるのである。あまり恥ずかしく思うことはない。」

6.3 シヌタブカへ向かう

兄はこのように、良い言葉を幾度も私の身体の上で口にした。それと同時に、私の身体は軽やかになったかのようである。私は心の底から嬉しく思った。ゆっくりと、長々と、さまざまなことを聞いて、今はどのようなことも分かった。よもや、年少の兄は予見する能力を持った者であるのか。幼少の頃から良いことも悪いことも見通していたのだ。私は聞いただけではあるが、まさに驚いた。後悔の気持ちを私は抱いた。このような理由があったことがよく分かった。それから、さらに、私は身投げをすることはできなかった。私は貧しく下らぬ者であり、私の意志が良くなかったために、兄たちは二人とも、心を悩ませたのだと聞くと、どのようにすることもできない。今は人間の考え、人間の心を私は持つものであるから、力無くではあるが、「兄よ」と泣いた。年少の兄の着物の裾をつかみ寄せて、腕や膝頭を撫でた。そうすると、兄は力無き者のように、私を撫でた。私の頭の上を幾度となく撫でた。私の顔に接吻をした。

なるほど、私が妬まれた様子は尋常ではなかったのだが、「如何なる人間がこのように地面を踏むことがあるのか」と兄は自分を差し置いて言いながら私を愛撫し、このように言った。「顔を上げてみなさい。毎日何も食べずに悪神と戦ったあげく、このように痩せてしまった。」このように言うので、私は畏まりながら顔を上げてみると、まことに年少の兄は疲れた顔色で表情が沈んでいる。まことに痩せており、頬の骨が浮かび出ているので、なお一層、私は無事をねぎらった。私も同じように、毎日何もたべずにいたものであるから、まことに痩せて力が出ない。年少の兄はこのように言った。

「イヨチ人、年少の兄が夜も昼も、館にある幣柵の上手で私の背後を守護してくれたので、私は生きているのだ。私が生きていることを知って、今はまことに安心し、穏やかな訪問、穏やかな会見を一緒におこなうことをまことに望んでいるのだ。そこで、これから、私の館へ下り、十分に物を食べて元気になったら、僅かな酒を醸して、まさしく、一族の会見、穏やかな会見をしよう。そして、おまえの悪い姉をもう少しのことで、私は討伐して一刀のもとに斬り捨てようと思ったのだが、いつものように、神の罰があって、この国土でしばらくの間だけでも暮らすことであろう。私はたいした容貌でも、たいした容姿でもないのに、貧しい女、下らぬ女はあのように淫欲に取り憑かれ、淫乱に取り憑かれ乱心した。淫ら

なこと、非道なこと、人殺しをするにしても並大抵ではないことをおまえにした。おまえは衣装も奪われた。

その上に、あのような酷い嘘、下らぬ嘘をついた。おまえの兄も、カムイオトブシも、年少の姉も、家の妹、私の妹も、四人とも、その嘘を信じ、このようになったのだ。イヨチ人、年少の兄とその姉だけは、嘘であると分かっていたのだ。そこで、この次の酒宴の終わりに、夫婦となる儀式があるとおまえの姉は思っている。その時に、私の妻の座に座ることになると密かに喜んでいるのだ。そこで、私が招き、人々がやって来たときに、同じ一族の傍らで、あのような悪いおこないを、一族にすべて話すつもりだ。その後で、おまえの姉はおまえの意志でどのようにしてもよい。男も女も、誰も駄目とは言わない。人々はすべておまえだけを憐れに思うであろう。そのこともおまえは知ることになるだろう。」

兄はこのように言った。今は、如何なることも、お互いに分かった。それから、年少の兄は驚いたことに、力の無い様子であるのに、鳥が飛び立つようにして、私を抱きかかえて天空へ飛び上がった。いつものように、数多くの渦巻きが行く手に巻き起こった。天空は鳴り響いた。林に当たる風が鳴り響いた。地面に当たる風が轟音をたてた。風の先端で粒の大きい霰、粒の大きい雨が地面に落ちた。地面は剥がれていった。酷い土埃、酷い草のごみ激しい吹雪のように飛び散った。その中で、神風の先端で飛んでいった。私の耳の端で風が鳴った。

まさしく、私は驚きの気持ちを抱いた。当たり前にも憑神を持つ者であると思っていたが、ただの人間と呼ばれる者が、憑神の力のためか、驚いたことをするものだ。まことに、力の無い様子であるのに、憑神の力がある様子なので、まさに心の底から驚きの気持ちを抱いた。私たちは下っていき、しばらくすると、トミサンベチ、シヌタブカの外にある櫓、その櫓の上に降り立った。

6.4 シヌタブカの館

家の側で兄の跳ねる音が鳴り響いた。刀の鏗の音が鳴った。兄は玄関の納屋へ回り、垂れ下がった簾戸を肩の上に跳ね上げた。兄は土間の上に、光とともに、靄とともに押し入った。私は見るともなしに眺めると、右座にカムイオトブシ、年少の兄と年少の姉が並んで座っている。左座に家の妹がおり、火の手前に座っている。一人残らず、心配をしているものであるから、悲しみの表

情を幾重にも顔に浮かべ、一点を凝視している。物音がするのを不思議に思い、一斉に戸口の方へ顔を向けた。年少の兄の身体の上、私の身体の上を見回した。大いに慌てたものであるから、目を見開いた。年少の兄は右座にいる年少の姉の腕の中に私を放り投げ、さらに、言うことはこのようであった。「さてさて、年少の姉よ、ノヤサラの女、私の妹を早く蘇生させてくれないか。」このように言われると年少の姉は弱いイムと激しいイムを繰り返して、あとずさりした。私の表情は硬くなった。私は畏まるものであるから、年少の姉の腕の中から下座へ、泣きながら膝を付いて進んだ。年少の姉は私を強く抱きしめ、私を激しく抱きしめた。カムイオトブシ、年少の兄と年少の姉、家の妹は三人でそれを聞き、まことに不思議に思ったものであるから、幾度も靄の中心を私に対して散らした。幾度そのようにしても、人間の姿として私を見定めることができない。今は、よく私の身体を見た。このような神々、このような貴人たちが自らを差し置いて如何なる神、如何なる貴人を目撃したというのか。一人残らず、表情が蒼ざめた。揃いも揃って私の手前へ視線を落とした。男の小袖だけを私が巻き付けている様子をよく見定めると、当たり前に驚くものであるならばさもあるが、まことに心の底から私を見定めたものであるらしく、隅々まで私を眺め回した。

その間に、年少の兄が炉の手前に、鏝の音を響かせながら座る音が響いた。座るとすぐに喉を響かせてこのように言った。「さてさて、年少の兄、年少の姉、私の妹よ、話があるからよく聞きなさい。」兄はこのような次第で、戦いの原因があったことを、始まりから今日のことまで、一つの言葉も落とさないようにして、隅々まで話した。すべて話し終えた。

その話を皆で聞くと、一日中、国土とともに揺らされたかのような様子である。「何ということか。本当のこと、まことのことを私たちは聞いているのか。もう一回話しなさい。もう一度話しなさい。」と言い、三人で私を抱きかかえた。私を手前へ向け、後ろへ向けた。まさしく泣きながら私を撫で、同じ言葉を口を揃えて言った。「まことに、よもや、長い間、人間の話、尊い話はこのようにあるものだ。私たちはただの人間、目の前がよく見えぬ者、揃いも揃って霊能力を欠く者であるから、今までこのような話も知らずにいたのだ。幸いにも、弟君は守護神の力を持ち、神々とともに一人の人間であるものであるから、これからどのようなことでも良い具合になるであろう。」このように互いに驚きの声を出した。

「なるほど、以前の酒宴のときに、弟君は何度も誰かに飲みさしを与えた。イヨチの女の脇のところで、何が目を見開いているという声をした。そこで、いつまでも、目を凝らして見ても、まったく何も、影さえも少しも見えない。その飲みさしを与えられた者も見えなかったが、まさしく、このようなことであったのだ。いい気味だ、貧しい女、下らぬ女、淫らな女、淫乱な女がそのように悪いおこないをした。その上、その酷い嘘を今まで揃いも揃って信じていた。なるほど、貧しい女には飲みさしが与えられず、一言も言葉をかけられなかった。怒って自ら憐れむ声を聞くと、心からの声であろうか、少しも憐れには思わなかった。少しも可愛がろうとは思わなかったが、まさしく、神の意向であったのだ。」このように安心し、怒った。私の無事をねぎらった。年少の兄の無事もねぎらわれ、泣きながら身体を撫で合った。

それが済むと、年少の姉は金の刺繍衣、神の刺繍衣を積み重ねた。絹の帯と神の鉢巻き、神の耳飾りと神の首飾りをいくつも取り出して私の傍らに置いた。私はまことに喜び、感謝しながらそれを身に着け、身なりを整えた。いつものように、私は美しいようであり、私の周囲は光り輝いている。たちこめた靄、その靄の中に身体を入れている。育ての兄と年少の姉の間に私は座らされた。家の妹は立ち上がり、水滴を幾度も用いて、良い煮炊きを懸命におこなった。しばらくすると、鍋が煮え、大きな高盛の御椀を私たちに捧げた。まさに空腹で倒れてしまいうちに思っていたので、今まで我慢していたものである。良い食物、美味しい食物を見ると、まことに心の底から嬉しく思った。私は御椀を高くかざし、低くかざして拝礼した。年少の兄も、まさに空腹であったので、大いに食事をした。

何と仲良く話をすることか。食事の最中に様々なことを話し、幾度も笑い言葉を互いに口にした。それを聞いて、心の中でまことに感心した。このような一族が好ましいことに、心の底から仲良くして、互いを可愛がり、悪いことも良いことも、神々の傍らで話をして喜び合い、言葉を述べる様子に私は感嘆した。このような様子であり、その間に、私の悪い姉が私を妬んで非道な仕打ちをしたことを思い出すと、まさしく自らを憐れに思った。私は自分の背後へ向きを変えると、顔の涙を拭いた。兄たちも、年少の姉も、家の妹も、私の思いを充分に分かっているものであるから、一人残らず、同じ言葉を口を揃えて言った。良い言葉を幾度となく私に投げかけて、私をなだめた。

良い食物、美味しい食物で、私は心臓の上手から心臓の下手まで伸び伸びした気持ちになった。まことに心が落ち着いた。年少の兄もまことに心が落ち着き、元気になった様子を見て、私は安心した。年少の兄は宝列の手前の仕切られた寝台、その寝台に上がった。私は左座の家の妹の部屋で、二人で寝た。それから毎日、私は休息させられ、大いに食事を与えられた。まさしく、私は大切にされたものであるから、しばらくすると、以前の心と以前の考えを取り戻した。

6.5 酒宴の支度

毎日私は暮らしており、元気になったことを年少の姉は知ると、絹を取り出し、布を取り出して、私の傍らに置いた。「さあ早く、妹よ、刺繍をしなさい。私が見てあげます。」このように言われて、喜びながら、三人で毎日、刺繍に没頭した。いつものように、私が刺繍したものは幾重もの神雲となって立ち昇る。その表面は数多の神光で輝いている。年少の姉と家の妹は、どちらも手先の器用さに優劣があるだろうか。まことに刺繍が上手である。なるほど、数多の村をこえて数々の噂がひろがる者たちである。刺繍が上手であることに、私は驚きの気持ちを抱いた。白らを差し置いて、私が刺繍した物の表面を眺め回すと、鼻を手で押さえ、口を手で押さえた。心の底から驚いた。「驚いたことに、同じ手を持つものであるのに、妹は手先が器用であること。何ということか、驚くべきことをするものであるか。」まさに私が刺繍したものを気に入った。私の兄たちも、まことに私が刺繍した物に感心したようである。

ある日、年少の兄は喉を響かせてこのように言った。「さてさて、年少の姉よ、食物の残りでもあるならば、酒を醸してほしい。今こそは、一人前の男に成長したので、私の手のところから天空にまで、木幣を捧げ、酒を捧げようと思う。先祖たちも一人残らず、供養するつもりだ。私たちの一族、遠くにいる者でも、近くにいる者でも、一人残らず招待して、私がすべきことを早く済ませて安心したいのだ。」

このように言われて、年長の兄も、年少の姉も、家の妹も、何と喜ぶことか。私もまことに嬉しくなった。四人で顔を見合わせて笑った。年少の姉は言葉を聞いてすぐに立ち上がり、家の外へ出た。外にある櫓、その櫓の上に立ち、村の上手と村の下手へ叫び声を出した。しば

らくすると、選ばれた長者と選ばれた婦人が集まった。六つの樽が倉から取り出された。私たちも手伝った。薪取りをする者は薪を集め、杵でつく者は杵つきをした。水汲みをする者は水汲みをした。木幣の木を切る者は木幣を切った。煮炊きをする者は煮炊きをした。私はそのことに集中した。しばらくすると、六つの行器が上座に置かれた。

私は物思いにふけた。何ということか、何としたことか。育ての兄が驚いたことに、成長の途中で私を可愛がり、心臓の先に私を入れるようにした。二人でそうしていたのだが、長い間、このようなことも見過ごして、今まで神々とともに欺かれることをされて、もはやこの国土で私はいないものと思っているだろう。その間に、あのようなことを聞かせて、私に会ったら、どれほど驚き慌てることであろうか。まことに安眠するだろうか。そのように考えると、幾度となく清い涙を私は流した。私の悪い姉、淫乱な者、極悪の神は今まで、どうにかして早く、年少の兄に嫁ぎたいと思っていた。大いにそれを望んでいるに違いない。そのように考えると、手の甲の節々が鳴るかのようなものである。どのようにすることもできない。心の中で私は怒りを覚えた。

その次に、イヨチにいる年少の兄も、私の意志が良くなかったために、長い間、白ら悩んだ。私も長い間、若者の心を悩ませたことを思い出すと、いかに悪神がしたこととはいえ、悔しい気持ちを抱いた。成長した肌を汚されて蘇生をしたことは、まことに恥ずかしい。どのようにすることもできないと考えたが、年少の兄は良いことを幾度となく私に言い聞かせたのだ。あまりに思い悩んだならば、良くないと私は思った。まことの心の中では酷く悔やみ、酷く後悔したが、私は我慢した。早く、育ての兄に会いたいものだ。そのようなことを幾度も私は白ら考えた。眠ることもできなかった。

二日、三日と時が流れると、神の望む物であるから、良い酒の良い匂いが家の中にたちこめた。それからまた、選ばれた長者と選ばれた婦人が中へ入ってきた。木幣を削る音、酒を漉す音が入り混じって響いた。私はそれを好ましく思った。年少の兄は自ら手を動かして木幣を削った。削られた木幣は幾重もの神雲となって立ち昇る。年長も兄も大勢の勇者たちも、鼻を押さえ、口を押えて、年少の兄が削った木幣に感心した。今は、木幣を削ることも、酒を漉すことも終わった。大きな家、その家中は新しい木幣で飾られた。なお一層、家の中では白い靄がたちこめた雲のように広がった。その中で神光が輝い

ている。私はそれを好ましく思った。酒宴をするための準備は終わった。

6.6 一族の参集

それから、ノヤサラ村とイヨチ村に伝言をした。イヨチの女、年少の姉にも、育ての兄にも会うことができるのであるから、まことに嬉しく思ったが、私の悪い姉、下らぬ女に会うことだけは嫌に思った。会うことになると考えると、何と嫌な気持ちになることか。私の兄たちは酒宴の衣装を身に纏った。ますます、帰天する神、帰天する貴人のようであり、どのように称賛することもできないほど美しい。私も年少の姉も、家の妹も、酒宴の衣装を身に纏った。まさしく今までの美しさを越えて、より美しいようであり、私たちは皆、互いの身体を見ることができない。

ノヤサラ村、イヨチ村の村の上空で轟音が鳴った。次第に、天空から神々がやって来る音が鳴り響いた。しばらくすると、それに伴う神風、城に当たる風が響いた。地面に当たる風が鳴り響く音がして、外にある櫓、その櫓の上へ神々が降り立つ音が響いた。何者たちかが、家の側の上で早足で歩く音が聞こえた。男たちの刀の鏗の音が響いた。女たちの懐の宝玉が鳴り響いた。私はそれを好ましく思った。人々は玄閔の納屋へ回った。次第に、咳払いの音が奥に響いた。金属の音のように響いた。垂れ下がった簾戸を風で揺らした。何者たちかが、土間の上に光とともに、靄とともに押し入ってきた。

私が見ると、何ということか、何としたことか。育ての兄であり、今は男の容貌を備えている。ますます、今の美しさはもの凄い。どのように称賛することもできないほど美しい。その背後にイヨチ人、年少の兄がおり、いつものように神々しい姿である。一人残らず酒宴の衣装を身に纏っており、なお一層、どのように称賛することもできないほど美しい。左座へ足を向け、炉の手前に膝を並べて座った。

その間に、垂れ下がった簾戸が持ち上げられ、何者たちかが敷居をまたいで入ってきた。土間の上で手を付いて這う者を見ると、イヨチの女、年少の姉であり、神々しい姿である。大きな小行器を持っている。その後に続く者を見て、私は目の前が暗くなった。私の悪い姉であり、今はまことに女の容貌をしている。ますます、人間であるのか。どのように称賛することもできないほど美しい。私の衣装を身に纏っているものであるから、なお一層、容姿が美しい。小鳥の耳飾りの神光は、人間の顔の上で太陽の光のように明るく輝く。なお一層、異彩を放つ容貌、異彩を放つ容姿をしている。どのように称賛すればよいのだろうか。

神々しい姿をしており、その周囲は神光で輝いている。大きな小行器を持っている。姉は手を付いて這うようにして人ってきた。私はカムイオトブシ、年少の兄と年少の姉の間で、家の妹とともに畏まり、髪の裾を床に着けていた。

育ての兄と私の悪い姉は二人で私の方へ目を向けた。幾度となく、靄の中心を目で散らした。そのようにしたが、私はわざと、強固な靄を幾重にもめぐらせていた。その間に、年少の兄は長押にある槍を取り出し、槍の鞘を払った。それを低い杖にして身体を支え、上座に出てきた。身体を見ることはできない。たちこめた靄、その靄の中に身体を入れている。刀の鏗の音が鳴り響いた。兄は上座に立ち、槍の末端に顎を乗せた。談判する声が郭公の声のように響いた。驚いたことに、いつものように、何と喉使いが巧みで、声が美しいことか。談判の言葉で喉の奥を美しく振った。口元は帰天する神のように響くかのである。

そして、言葉を発した。このように、それぞれが立派に成長したのであるが、成長の途中であるように、ノヤサラの女の長女の方が妹を妬んだことをすべて話した。「私の一族、近くにいる者たちにも、遠くにいる者たちにも、このことをすべて聞かせてから、悪いところへ追い払うつもりだ。それから、落ち着いて神に祈り、先祖の供養をするつもりだ。」このように一日中、これまでのことを、一つの言葉も落とさないようにして、詳しく話した。「良いことも悪いことも、神々の傍らで話し、一族にすべて聞かせるのだ。いつまで、ノヤサラの女が如何に神々の目を盗んで淫らなこと、淫乱な振る舞いをしようとも、いちまでも幸運が続く訳ではないのだ。早く、神が処罰するものであるから、酷い懲罰、酷い懲らしめを受けるだろう。どのように妬まれ痛めつけられたとしても、正しく清い心を持つ者は、男でも女でも、遅かれ早かれ、神に見守られ、それまで以上に幸運に恵まれるのだ。」このように年少の兄は談判をした。

育ての兄はそれを聞いて、そのようにすると私が思った通り、強張った身体を伸ばした。大勢の者たちは飛び跳ねた。育ての兄がその途中で、飛び跳ねる音が響いた。刀の柄を手で押さえ、女たちの方を凝視した。その目は二つの小さな星のように並んでいる。持ち前の荒い気性を顔に浮かべた。

「何と汚らわしく、忌々しいことか。私の妹、下らぬ女は驚いたことに、まさか淫らなこと、淫乱なことをするにしても、ただならぬことをした。その間に、嘘をつくにしても、驚いたことに、尋常ではないことをしたのか。ただならぬことだ。まさかこのような話を聞くことになるとは思わなかった。驚いたことに、少しの下らぬことさえ私にはとてもできない。私の悪い妹、下らぬ女、極悪の神、極

悪の人間め。成長の途中でまたとない養育、神の如き養育を私はおこなった。長女も次女もどちらも変わりなく思っていた。同じように幾度も良いことを言い聞かせていたのだが、痛めつけるにしても尋常ではないことをするのであるか。怖ろしいことだ。どのようにすれば安心できるのか。私がこの手で悪い妹、下らぬ女を懲らしめてやろう。」兄はこのような言って、跳び上がる音が鳴った。

6.7 姉への復讐

すると、年少の兄が喉を響かせることはこのようであった。「さてきて、ノヤサラ人、年少の兄よ、あなたが怒ることはもつともであるが、今はこのように、戦いの原因、悪事の原因は分かっているのだ。そこで、私たちの酒に血潮が混ざったかのようなのである。女が引き起こした悪事であるから、私の妹の意志に任せればよいのだ。私も戦いの狂気、戦闘の狂気に取り憑かれているので、いっそのこと、ノヤサラ村を襲って貧乏な女、下らぬ女を二切れ、三切れにしてやろうかと思ったが、私の妹の意志に任せようと思ひ、我慢しているのだ。年少の兄よ、落ち着いてほしい。」

このように言われると、育ての兄は驚いたことに、怒っているにも関わらず、畏まるものであるから、元通りに刀を納めた。私の悪い姉はそれを聞いて、まさしく慌てたものであるから、額がふるえている。水に浸した昆布のようである。そうではあるが、私はまったく相手にせず、「育ての兄よ」と泣き叫んだ。その腕の中へ身を投げた。私の泣き声が響いた。私は声を出した。あのよう私の悪い姉が話をし、あのよう私を痛めつけたことも、あのよう私が謝っても、なおのこと、あのよう非道な仕打ちを私にしたこともすべて詳しく話した。泣きながら話した。育ての兄は「妹よ」と、「心臓よ」と言ひ私を撫でた。比類なき勇者は私の上で幾度となく、かすかな涙を流した。私の兄たちも一人残らず、私の姉たちも、大勢の長者も、婦人たちも、一人残らず私を憐れに思うものであるから、一人残らず同情して涙を流した。カムイオトブシ、年少の兄も、他の人々も、今こそはイヨチ人、年少の兄に出会い、互いに挨拶をした。私もイヨチ人、年少の兄の着物の裾を寄せ集め、「兄よ」と言ひ挨拶をした。今こそは、兄は私の方へ振り向き、「妹よ」と、「心臓よ」と言ひ私を撫でた。

その間に、私の悪い姉は泣く真似をして、すすり泣きをした。さらに、言うことはこのようであった。「さて

さて、私の妹よ、話をするからよく聞きなさい。まことに私が悪いのだ。如何なる神、如何なる貴人に取り憑かれたのか、非道な仕打ちをおまえにした。いつもそれを思い出すと、まことに嘆き悲しんでいたのだ。今は、まことに神罰を受けるべき者である。私が望んでおまえにしたことであるが、今はまったく何も分からないのだ。どうにかして、いつまでもおまえが怒り、私に腹を立てたとしても、これからは、おまえは神に見守られる者であるから、まことに幸運に恵まれるのだ。命だけは助かるようにしてほしい。これからは、まことに姉の振る舞い、年上の女の振る舞いをして、おまえを可愛がるつもりだ。」このように言ひした。

私は聞いただけではあるが、激しい狂気がこみ上げてきた。私が飛び跳ねる音が鳴った。「何を言うのか。私の悪い姉、極悪の神、極悪の淫らな者、驚いたことに、実りのないおかしな気持ちを抱くのか。あのような悪事、淫らなことを神々の傍らであなたはした。あなたはどのような顔をして、この国土で生きていこうと思っているのか。あなたのような悪人、淫らな者が、痛めつけることを人々とともに、私にした者が、この国土の上にも、いなかったとしても、人は何とも思わないのだが、私たちは、あなたが生きていることをまことに恥ずかしく思うのだ。少しでも、人間の心、間違った心を私が持っているとおまえが思うならば、早く、自ら身体を投げ棄てるのが、少しはあなたに似つかわしい。私たちも少しは恥ずかしい。このように弱者がいつまでも、極悪の心を持ち、極悪の振る舞いをするものであろうか。恥ずかしげもなく、訳の分からないことを言う様子はこのようにあることか。死にたくて、命を絶ちたくて、このように振る舞うのか。」

私はこのように言ひ、姉の頭髪を手に巻き付けて、土間の上に、下座に引き倒した。外へ姉を引きずり出し、城の下手で激しく叩いた。太い柱、細い柱に叩きつける音が私の腕の先で鳴った。私の手の下や手の上に姉の髪が巻き付いた。姉は叫び、恐怖の声を出した。「私の妹よ、私を憐れんで、酷いことをしないで、蘇生すること、命を奪わぬことをしてほしい。」このように言ひされて、私は驚きの気持ちを抱いた。なお一層、激しい狂気がこみ上げてきた。私の悪い姉、下らぬ女は驚いたことに、私を襲ひ、私を痛めつけたときに、まことに私が追い詰められたときに、良い言葉を幾度も繰り返し、泣きながら私が謝ったのに、なおのこと私を痛めつけ、殺すにしても並大抵ではないことをしたことを思い出すと、目に

見えるものが二つになり、三つになったかのように思った。

姉の耳の上にある小鳥の耳飾りを私は取り外した。姉の首元にある小鳥の首飾りを私は取り外した。姉の絹の帯を私は解いた。小鳥の小袖、神の小袖を私は裂いた。姉は肌着のみの姿となった。私は心の中で怒りを覚えた。私は懐の刀を取り出した。私が姉にされたことであるから、私は深く突き、深く斬り裂いた。私は姉を殺した。死んだ身体を遠くの岩山、その岩山の背後に投げ棄てて、「沼の神の腕の中に送り届けるのだ。早く、いつまでも良い思いをしなさい。」と引導を渡した。

それから、私は背中を打ってお祓いをした。小鳥の耳飾りも、小鳥の首飾りも、神宝も、小鳥の形象が入った金の小袖、神の小袖も、すべてお祓いをして清めた。それから、神の耳飾りを耳元に付け、神の首飾りを首から下げた。金の小袖を身体の上に広げた。絹の帯を胴に巻いた。神の鉢巻きで頭髪を高く上げた。いつものように、私の衣装は神光で輝き、なお一層、たちこめた靄、その靄の中に私は身体を入れている。私の周囲は神光で輝いている。自らのことではあるが、まさしく美しい様子であると思った。まさに、人間の姿ではないような様子である。家の中、地上は静まり返った。何の声も、何の音もしない。

家の側の上で、私が歩く音、私の懐の宝が鳴った。玄関の納屋へ私は回り、垂れ下がった簾戸を風で揺らした。土間の上に、光とともに、靄とともに私は押し入った。見ると、私の兄たちも、私の姉たちも、家の中にいる長者たちも、婦人たちも、一斉に、気の毒に思うものであるから、一斉に、頸の上から俯いていた。幾度となく激しい涙を私は流した。そして、私が言葉を発することはこのようであった。「何ということか、何としたことか。私の悪い姉、あのような神、あのような貴人が良い心を持ち、婦人の振る舞いをしたならば、これから私は姉を大切に、成長する間、満足して、似つかわしいものであるのに。如何なる神、如何なる人間に取り憑かれたのか、あのように淫らなことをした。そのために、私は戦いの狂気、戦闘の狂気に取り憑かれたのだ。私がされたことの仕返しをしてやろうと考えたものであるから、腕の中で、殺すにしても並大抵ではないことを私はしたのだ。今は逆に後悔し、憐れに思うのだ。」

このように泣きながら私が話すと、私の兄たち、私の姉たちは一斉に、私に顔を向けた。同じ言葉を口を揃えて言うことはこのようであった。「なるほど、おまえが

言う通りであるが、今はどのように言うことも、どのようにすることもできないのだ。おまえは立派な心を持ち、穏やかな意志、神の如き心を私たちが持つのだ。神々も人間も、おまえの心の中を見通している。同じように、おまえの悪い姉がまったく、どこまでも、婦人の心、清い心を持つことはないこともよく分かっている。そこで、おまえの姉が望んでおこなったことであるから、おまえの手で懲罰を与えたのだ。そのことにさえ、死んでから満足しているだろう。今は、悪事をすべて解決したので、まことに安心したのだ。まことに良かった。これからは、このように自らを責めないで我慢して、おこなうべきことを立派におこなったならば、神も人間もまことに喜ぶのだ。」このように互いに、良いことを幾度となく私に言い聞かせた。

頭領たち、婦人たちは、当たり前私を憐れみ、可哀想に思うものであるならばさもあるが、悲しみの表情を幾重にも顔に浮かべている。清い涙を幾度となく流している。言葉を発することはこのようであった。「感心なことだ。婦人であるから、いつまでも、婦人のおこない、婦人の心を持つことができるのだ。」このように私は褒められた。そのように言われると、「なるほど、私の兄たちも、私の姉たちも、私の一族も、このように、良いことを幾度も私に言い聞かせたのだ。言うことを聞かずに、泣いていてはいけない。幸いなことに、良い酒、神の酒があり、心の底から喜ぶことにしよう。大勢の人々を神々とともに、悲しませることは良くない。」このように私は思い、再び元気を取り戻し、心を穏やかにした。心を落ち着けた。

6.8 結婚

別な人間であるかのように、笑い言葉を幾度となく私は返した。そのようにすると、私の兄たちも、私の姉たちも、私の一族も一斉に、まことに喜び、これから神に祈るために、向かい合って座った。長い酒宴の座が延べられた。酒宴の座の上手は霞んでおり、酒宴の座の下手も霞んでいる。育ての兄の美しい手は高く上げられ、行器の背後の座に招かれた。イヨチ人、年少の兄と対座した。その傍らに年少の兄が座った。カムイオトブシ、年少の兄は酒を取り出した。年少の姉は酒宴の座を行き来して酒を注いだ。天空にまで、神々のところまで、木幣が届けられ、酒が届けられた。私たちは祈りを終えた。

それから、遠い先祖、近い先祖、遠い祖母、近い祖母を一人残らず供養した。私たちは安心した。

それから、またとない酒、神の酒を酌み交わした。家の妹とイヨチの女、年少の姉と三人で、異なる鳥のように、目立つ鳥のように、踊りや歌の先頭に立った。今は心の底から嬉しく思い、歌や踊りをした。大勢の人々は私の方へ目を向けた。当たり前前に私に感心するものであるならばさもあるが、まさしく口元に笑みを浮かべている。私の手前へ視線を落としている。育ての兄は幾度となく私の方を見て、幾度もうなづいて見せた。何を思うのか、目の端に涙が浮かんでいる。それを見ると、私も自らの背後へ向きを変え、涙を拭った。いつまでも、育ての兄は幼い子供のように、赤子のように、私を可愛がり、私に優しくする様子を見て、心の底から育ての兄を愛おしく思った。

今は酒宴も半ばになった。年少の兄は杯を高くかかげると、イヨチの女、年少の姉を呼び寄せた。年少の姉は畏まり、膝をついて這うようにして進み、杯の下で頭を下げた。杯の上を撫でながら、年少の兄はこのように言った。「さてさて、イヨチの女、年少の姉よ、あなたは婦人の心を持ち、婦人の振る舞いをする事ができる。そこで、幸運に恵まれ、立派に成長したことをまことに嬉しく思うのだ。神のおこない、人間のおこないはこのようにあることであるので、今こそは、互いに結婚し、連れ添うことをすべきである。残された言葉、先祖の言葉はこのようにあることであるので、カムイオトブシ、年少の兄の食事の世話をしてほしい。」

このように言われると、姉は当たり前前に喜ぶものであるならばさもあるが、密かに笑いを浮かべている。姉は杯を受け取って高くかざし、低くかざし、拝礼した。その酒を飲んだ。飲みさしを受け取った。姉は下座へ来ると、まさに喜びに浸っている。カムイオトブシ、年少の兄はまことに喜ぶものであるから、腰の真中を折り曲げて、妻帯の拝礼をした。

再び、年少の兄は杯を高くかかげ、年少の姉を呼び寄せた。年少の姉は畏まりながら、膝をついて這うようにして進み、杯の下で頭を下げた。兄は杯の上を撫でながら、同じように、「婦人の心、立派な心を持って、ノヤサラ人、年少の兄の食事の世話をしてくれないか」と言った。何と年少の姉は喜ぶことか。自らの背後へ向きを変え、まことに笑いを堪えている。それを見て、私もまことに嬉しくなった。年少の姉は杯を受け取り、同じように拝礼した。その酒を飲み、飲みさしを受け取っ

た。それからまた、下座へ来ると、炬燵木の上で落ち着かない様子である。笑い言葉を幾度となく返している。それを聞いて、私は密かに笑いを浮かべた。育ての兄はまさしく喜ぶものであるから、腰の真中を折り曲げて妻帯の拝礼をした。

年少の兄は再び、杯を高く持ち上げて、家の妹を呼び寄せた。家の妹は神の如き様子であり、光の中にいる。畏まりながら、膝をついて這うようにして進み、杯を受け取った。兄は杯の上を撫でた。「残された言葉、先祖の言葉はこのようにあることであるので、立派に、婦人の心、清い心を持ち、イヨチ人、年少の兄の食事の世話をしなさい。」このように言われると、当たり前前に喜ぶものであるならばさもあるが、まだ年少の兄が話している最中から、密かに笑いを浮かべている。その酒を飲み、飲みさしを受け取った。杯を運んでから、下座へ来ると、まことに喜んでおり、口数が多い。それを聞いて、心の底から可笑しく思った。イヨチ人、年少の兄はまことに喜ぶものであるから、腰の真中を折り曲げて、妻帯の拝礼をした。

再び、年少の兄は杯を高く持ち上げ、私を呼び寄せた。私は畏まりながら、膝をついて這うようにして進み、杯の下で頭を下げた。大きな杯に酒がなみなみと注がれた。私は杯を受け取った。そして、兄は私を撫でながらこのように言った。「さてさて、私の妹よ、先祖の後で、神の意向により、二人とも立派な成長、健やかな成長をしたのだが、成長の途中で、極悪の神、極悪の人間がおまえを妬むことをした。私たちは成長した人間であり、お互いに、もう少しで死にそうな目に遭った。まさしく、自らの無事をねぎらうのであるが、神に背くおこないを少しもしていないので、今もこれからも、安心している。人間のおこない、神のおこないはこのようにあるのだ。それから、残された言葉、先祖の言葉はこのようであるので、これから私の食事の世話を、トミサンベチ、シヌタブカの神の館の中で暮らし、立派に婦人の振る舞い、神の振る舞いをしてほしい。」

このように言われて、そのようになることは、まことに分かっていたのだが、まさしく嬉しくなった。なるほど、あのような神、あのような人間に私は妬まれて、もう少しのことで死ぬところであったが、神の意向により、今は連れ添うことができるのであるから、まことに心の底から、涙とともに、私は嬉しく思った。大きな杯を私は高くかかげ、低くかかげ、拝礼した。少し酒を飲んだ。それから、私は飲みさしを受け取った。私は杯を運んで、

下座へ戻った。私は笑い言葉を幾度となく返した。育ての兄も、まことに喜び、良いことを幾度となく、私の前で話した。拝礼を幾度となく繰り返した。年少の兄も、まことに喜び、笑う声や話す声が響いた。今はしなければいけないことを、すべて私たちは終わらせた。私たちは安心し、私の一族も、頭領たちも、婦人たちもまことに安心し、感謝の言葉を述べ、皆で喜んだ。まことに私たちは感謝した。

6.9 別れ

それから、なお一層、酒宴は盛り上がり、私の一族は一人残らず、拝礼を幾度となく繰り返し、感謝しながら帰っていった。その後で、まことの身内のみが残った。まさしく、美味しい食物、良い酒があり、酒を飲みながら、悪いことも良いことも私たちは話し合った。二日、三日と時が流れた。驚いたことに、私の兄たちは、いずれの者も容貌が美しく、勇敢であり、優劣があるだろうか。頭領ばかり、長者ばかりが肩を並べ、膝を並べている。いずれの者も雄弁であり、話が上手であり、優劣があるだろうか。夜も昼も、一人残らず、同じようによく話し、よく笑った。私は驚きの気持ち、喜びの気持ちを抱いた。それと同じように、女たちも、私の姉たちも、何と喜び合い、嬉しがり、よく話すことか。笑い言葉を幾度となく返した。私も笑いながら、喜びながら煮炊きをして、喜び合った。

年少の兄と家の妹は、先祖伝来の物入れに、たくさんの宝物や女の宝、絹や布切れを詰め込んだ。大きな荷物をこしらえた。育ての兄はまことに喜びながら、幾度も感謝し、「再び、早く会いたいものだ。」と言った。私の方を見ると、頸の根元も折れそうなほど、幾度となくうなづきを繰り返した。良いことを幾度も私に言い聞かせた。これからは人間のおこない、神のおこないであるから、夫を持つことを私はした。育ての兄と、互いに、しばらくは会うことができないに違いないと思うと、清い涙を幾度となく私は流した。年少の姉も、同じように、良いことを幾度も話した。今はまさに、まことに似つかわしい容貌、似つかわしい容姿であるのだ。またとない夫婦である。兄と姉は外へ出ていった。外にある櫓、その櫓の上から、天空へ飛び上がった。立ち去る音が鳴り響いた。ノヤサラ村、その村の上空で音が鳴り止んだ。

その後で、イヨチ人、年少の兄も、拝礼を幾度となく

繰り返した。まさしく感謝しながら立ち上がった。家の妹も、まことに喜び、大きな荷物をこしらえた。幾度となく、互いに別れを惜しんだ。今はまさに、似つかわしい容貌、似つかわしい容姿、神の如き様子である。兄と妹は外へ出ていった。天空へ立ち去る音が鳴り響いた。イヨチ村、その村の上空で音を鳴らした。その後で、周囲は静まり返った。その後で、カムイオトブシ、年少の兄とイヨチの女、年少の姉は一緒になって、城の上手にある神の館へ向かった。

6.10 兄との暮らし

その後で、今はまさに、私たちは二人だけになった。年少の兄は上座から飛び跳ねて、私を抱きかかえた。右座の炉の傍らに座った。「妹よ」と、「心臓よ」と言って、あらためて挨拶をした。兄は私の頭髪を撫で、私の顔に接吻をした。私も「兄よ」と言った。年少の兄の着物の裾を寄せ集めた。私は兄の腕も足も、膝頭も撫でた。丁寧に挨拶の儀式をした。私たちは互いに撫で合せて安心した。

それから、今はまさに、私は年少の兄の食事の世話をするために下座へ行き、水滴を幾度も用いて、良い鍋の耳元から水をかけて洗った。鍋の中に水を入れて、火にかけて。精白した穀物を鍋の中へ注ぎ入れた。鍋の底へ頭を入れるようにして、火をつけた。良い鍋の煮立つ音が鳴った。鍋の近くではあるが、嘘のこともまことのこと、私たちは語り合った。私たちは笑い合い、互いに声を上げた。今はまさに、誰もおらず、人目をはばかりることなく、まさしく二人だけであるものだから、心の底から、心の中から、互いに、成長の途中で、このように思っていたことを私たちは話し笑い合った。

私はよく炊けた飯をへらでかき混ぜ、へらでひっくり返した。よく炊けた飯はへらを使う最中に、湯気がかき分けられ、湯気が横になびいた。私は鍋を火から遠ざけた。しばらくして、私は鍋を火から外し、薄造りの御膳、薄造りの御椀を取り出して重ねた。御椀の下に盛り付けるものは小さくして、上に盛り付けるものは大きくして、高盛の飯を盛りつけた。私は畏まりながら頭の上に御膳を持ち上げて、年少の兄に差し出した。

兄はそれを受け取って高くかざし、低くかざして拝礼した。兄はゆっくりと食事をした。まことに美味しいと称賛した。「今はまさに、私の妹が煮炊きした食物を食

べた。まことに、私の妹は煮炊きが上手である。とても美味しい。」このように言い、私を愛撫した。私はまことに嬉しく思った。兄は御馳走の半分を私に差し出した。私はそれを受け取って高くかざし、低くかざした。私は拝礼して、それを食べた。今はまさに、年少の兄が半ば食べたものを私は食べた。何と味が良いことか。まことに美味しく、私は舌鼓を打った。なお一層、年少の兄は私を愛撫した。

今は食事をすませた。片付けをすると、年少の兄は頸の根元も折れるほど、幾度もうなづきを繰り返して、このように言った。「さあ早く、私の妹よ、寝床を二つこしらえなさい。今こそは、まことの夫婦であるから、今晚はまさしく、先祖の寝床、祖母の寝床で横になり、夫婦のおこないをして、まさしくよく眠り、安心して眠ろうではないか。」このように言われて、私はすぐに嬉しくなった。何と私は嬉しく思うことか。私は密かに笑いを浮かべた。私は言葉を聞いてすぐに立ち上がった。そのようにすると、年少の兄も、まことに心の底から、心の中から喜び、私を可愛がるものであるから、口元に笑みを浮かべた。私を愛撫し、私から目を逸らすことがない。

私は家の奥へ飛び跳ねて、二つの寝床、良い寝床を美しくととのえた。私は夜着の中に身体を入れて横になった。年少の兄は立ち上がった。刀の鏗の音が響いた。兄は近づいてくると、留め金のついた帯を外し、その音が鳴った。神授の刀と薄造りの兜をともに縛り、掛け竿の上手に掛けた。金の小袖を上の方に掛けた。それから、裸になると、私の懐に潜り込んだ。驚いたことに、今はこそは勇者の肌の香り、頭領の肌の香りが激しい風のように、私を奥へ押しやった。寝床の上ではあるが、兄は「妹よ」と、「心臓よ」と言って、私を強く抱いた。私の顔に接吻をした。私を可愛がった。今は、人が噂をする若者のおこない、若人のおこないをして、互いに心を確認め合った。心を通わせた。なお一層、年少の兄を私は心臓の先に入れるようにした。まことに愛おしく思った。毎日、互いに愛し合い、良い寝床、その寝床の中でよく眠った。

年少の兄は私を妻の座に座らせた。年少の兄とカムイオトブシ、年少の兄は、毎日一緒になって山で獲ったものを運び入れ、沖で獲ったものを運び入れた。年少の姉は幾度も訪ねてきた。互いの家を行き来して、仲良く話をした。少しも寂しいとは思わなかった。その間に、聞くところによれば、育ての兄たちは夫婦揃って働き者であり、まことに良い噂が神の噂として、広がっている。

それと同じように、イヨチ人、年少の兄たちも、夫婦揃って、良い噂がたつ。それを聞いて一斉に、私たちはまことに喜んだ。私の一族も、そのように、数多くの村を越えて、良い噂が神の噂として広がっている。

何を食べたいとも、何を欲しいとも思わずに、幸せに暮らす様子を見ると、いつまでも、私とともに育った女、私の悪い姉が私にしたことを忘れることができない。訳の分からぬことを言い、あのような悪事をおこなったのだ。半ばは、いつまでも、憐れに思い、気の毒に思った。私たちはこの上なく幸せに暮らした。揃いも揃って、私たちの噂が神の噂として広がった。いつも変わりなく暮らしていることを、私は話すのだ。